新見公立短期大学紀要　第29巻　第２号
pp. 77－81, 2009

研究ノート

A短期大学看護学科における卒業研究の動向
―家族看護に視点をおいた分析から―

木下　香織[1)]*・山縣　由子[1)]・掛屋　純子[1)]・古城　幸子[1)]

1）看護学科

（2009年２月４日受理）

本研究の目的は、Ａ短期大学看護学科における1999年から9年間の家族看護に視点をあてた卒業研究の動向を明らかにすることである。9年間の卒業研究561編のうち、家族看護に関する研究論文80編を分析対象とした。学生は、育児や介護など各家族周期の代表的な発達課題を研究テーマに取り上げており、その動向には社会背景との関連がうかがえた。研究方法では、面接法や質問紙調査法を用いた調査研究が多くを占めていた。精神看護領域での研究テーマや事例研究での取り組みは少なく、学生の研究テーマ決定時期との関連が大きいと考えられた。社会背景に伴って変化し多様化している家族の形態や機能の理解につながるよう、教育や研究指導が必要である。

（キーワード）：卒業研究　家族看護　動向

はじめに

Ａ短期大学では、研究活動の基礎を学び研究的態度を養うこと、研究活動を通して自己の看護観を深めることを目的として、「看護研究」を開講している。研究に関する基礎知識に関する講義を受けながらテーマの選定を行い、最終的には個人で論文にまとめ、学内での発表をおこなう。小野寺[1)]は卒業研究の指導上の留意点の１つに学生の主体性の尊重を挙げ、「学生自身が行う研究である以上、学生自身が興味・関心を抱いたテーマを尊重すべき」と述べている。Ａ短期大学においても、研究テーマの選定は学生個人が関心のもっている内容に基づいて進めており、その結果、毎年まとめられる研究のテーマは幅広いものである。そこで、卒業研究のテーマの動向から、学生の看護学に関する興味・関心を把握し、今後の教育に役立てたいと考えた。

わが国における家族看護の実践は戦後の結核対策に始まり、母子関係を代表とした家族看護を中心に発展し、医療の高度化や疾病構造の変化、人口の高齢化といった社会の変化に伴って発展してきた[2)]。そして、1994年に「日本家族看護学会」が発足した。

本稿では、1996年の看護教育カリキュラム改正以後に「看護研究」を受講した学生の論文を対象に、「家族看護」に関連する卒業研究の動向を明らかにした。

Ⅰ．研究目的

平成9年度改正カリキュラム以降の9年間の学生の卒業研究から、「家族看護」に視点をおいた研究の動向を明らかにする。

Ⅱ．研究方法

1．**対象**：1999年から2007年にＡ短期大学看護学科学生が卒業研究として取り組んだ561編のうち、家族看護に関する研究論文80編を分析対象とした。

2．**分析方法**：研究テーマの類似性、研究対象、研究方法について分類し、家族看護に視点をおいた研究の動向を分析した。分析にあたっては、研究者間で検討を重ねておこなった。

3．**倫理的配慮**：「看護研究集録集」として公表された論文を対象とし、個人が特定される研究論文の著者名は分析対象から削除した。研究対象の年度の卒業生に、研究の趣旨や個人情報保護の方法について書面にて説明し、同意が得られない場合はE-mailでの連絡を受けつけた。

Ⅲ．結果

1．家族看護に関する研究数の経時的変化

9年間の家族看護に関する研究論文数は80編であり、その経時的変化を図1に示した。

1999年から2004年までは毎年、研究数が増加し、2004

*連絡先：木下香織　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

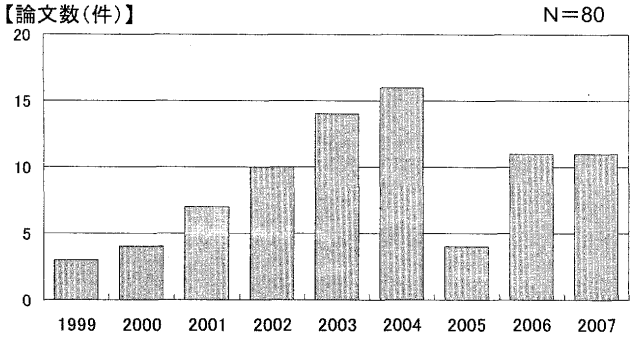

図1　研究論文数の経時的変化

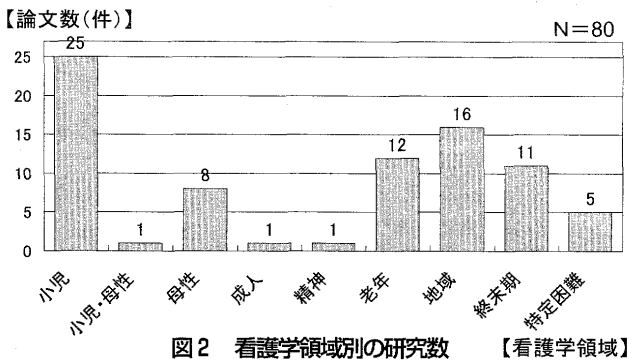

図2　看護学領域別の研究数

年には16編で全体の1/4を占めている。2005年は4編と少ないが、2006年、2007年はともに11編であった。

2．研究テーマの内容と経時的変化

鈴木らは、家族が家族看護を必要とするニーズは、表1に示した3つに分類できる[3]と述べている。80編の研究テーマを家族看護のニーズの分類に基づいて、テーマの類似性によりカテゴリー化した。家族看護ニーズのカテゴリーと研究論文数の経時的変化を表2に、カテゴリーと研究テーマの例を表3に示した。

〈家族のあり方や家族関係そのものが健康上の問題である〉は4編であった。小児期の母子関係の「愛着形成」2編、「子どもの問題行動」1編、「小児の虐待」1編に分類できた。研究数は2000、2001、2003、2007年に1編ずつであった。

〈家族が、ある家族成員の健康問題のため、精神的、身体的、社会的な影響を受けている〉は36編であった。

表1　家族看護のニーズ

1. 家族のあり方や家族関係そのものが健康上の問題である場合
2. 家族が、ある家族成員の健康問題のため、精神的、身体的、社会的な影響を受けている場合
3. 家族が、家族成員の健康問題の予防・回復、健康の保持・増進に重要な役割を果たしている場合

表2　家族看護ニーズのカテゴリー別にみた経時的変化

家族看護ニーズ ／ 年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
1. 家族のあり方や家族関係そのものが健康上の問題である										(4)
愛着形成					1				1	2
小児の虐待			1							1
子どもの問題行動		1								1
2. 家族が、ある家族成員の健康問題のため、精神的、身体的、社会的な影響を受けている										(36)
ターミナルケア		1	1	3	1	1		3	3	13
癌疾患				2		1				3
子どもの病気・障害・入院	1		1	2	2	4	1	2	2	15
その他				3	1			1		5
3. 家族が、家族成員の健康問題の予防・回復、健康の保持・増進に重要な役割を果たす										(40)
妊娠・出産		1			1	3				5
育児関連	1	1	2		3	1	1			9
介護関連	1		2	1	4	5	1	3	2	19
その他					1		1	2	3	7
計	3	4	7	10	14	16	4	11	11	80

終末期の家族を対象とした「ターミナルケア」13編、癌疾患患者の家族への援助に関する「癌疾患」3編、「子どもの病気・障害・入院」に関連した15編、その他3編に分類できた。研究数は、「ターミナルケア」「子どもの病気・障害・入院」はほぼ毎年、数編ずつであったが、「癌疾患」は2002、2004年のみであった。

〈家族が、家族成員の健康問題の予防・回復、健康の保持・増進に役割を果たす〉は40編であった。夫立会い分娩などの「妊娠・出産」5編、育児不安や祖父母学級など「育児関連」9編、在宅介護や高齢者介護、制度・サービスの利用など「介護関連」19編、その他7編に分類できた。研究数では、「育児関連」は2005年までほぼ毎年、「介護関連」は2001年以降毎年、数編ずつの研究があった。「妊娠・出産」は2000、2003、2004年のみであった。

鈴木らは、家族看護学は家族の健康問題、援助の場、家族周期から、「母性看護」「小児看護」「精神看護」「成人看護」「精神看護」「老人看護」「終末期看護」「地域看護」のあらゆる看護の領域を網羅している[4]と述べている。研究テーマの内容から看護学領域で分類した結果を図2に示した。「小児看護」25件、「母性看護」8件、その2領域にまたがる内容が1件で、母子の看護が全体の42.5%を占めた。「地域看護」16件、「老人看護」12件、「終末期看護」11件、「成人看護」「精神看護」が各1件、特定困難なテーマが5件であった。

表3　家族看護ニーズのカテゴリーと研究テーマの例

家族看護ニーズ ／ テーマの例	
1. 家族のあり方や家族関係そのものが健康上の問題である(4)	
愛着形成(2)	・親と子のふれあい　－タッチケアの中の主にベビーマッサージを通しての考察－
小児の虐待(1)	・虐待：母親の育児態度と共依存
子どもの問題行動(1)	・問題行動をおこす子供の原因について　－乳幼児期の母子関係がもたらすもの－
2. 家族が、ある家族成員の健康問題のため、精神的、身体的、社会的な影響を受けている(36)	
ターミナルケア(13)	・看取りにおける家族の心理の変化　－家族へのインタビューを通して－ ・終末期における家族の葛藤と看護　－病名を知っていた家族と知らなかった家族へのインタビューを通して－
癌疾患(3)	・癌告知をめぐる家族の心理　－家族へのインタビューと文献から考える－
子どもの病気・障害・入院(15)	・障害をもつ子供の父親の受容過程を通じての支援　－Drotarらの情緒的反応の段階を用いての分析－ ・慢性疾患患児とその家族への支援　－ファミリーサポートハウスの機能と役割－
その他(5)	・痴呆症が本人・家族に与える影響とその要因 ・患者の回復過程に伴った家族の心理変化－事故により緊急入院した患者の妻へのインタビューを通して－
3. 家族が、家族成員の健康問題の予防・回復、健康の保持・増進に重要な役割を果たす(40)	
妊娠・出産(5)	・夫立ち会い分娩に関する研究　－既婚・未婚男女の意識調査－
育児関連(9)	・母親の育児不安の実態とその支援 ・世代による育児の変化と祖父母学級の効果
介護関連(19)	・認知症高齢者の在宅介護者の発展過程と支援の課題　－続柄別にみた介護の発展過程の違い－ ・介護上の問題とその対処プロセスにおける緩和要因　－介護健検者へのインタビューより－
その他(7)	・気管支喘息患児の生活管理および発作の対処に関する保護者の認識 ・精神障害者の「家族会」の実態と看護的介入　－精神障害者の家族と病棟看護責任者に焦点をあてて－

( )内の数字は研究件数を表わす

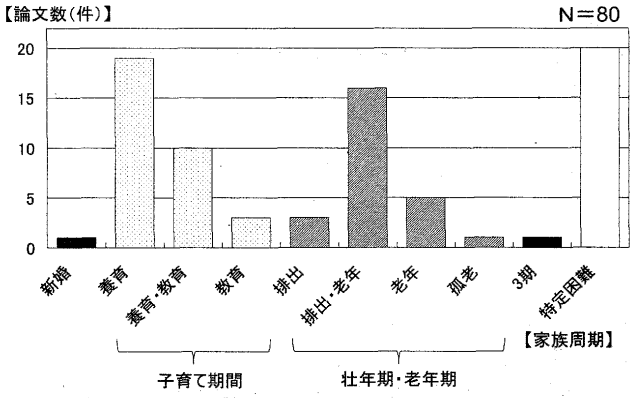

図3　研究対象者の家族周期

3．研究対象者

鈴木らは、「家族の変化の過程を家族の成長、発達であると考えて、その家族のたどる周期的変化の各期を家族周期（ファミリー・ライフサイクル）で表し[5]」ている。研究対象者を「新婚期」「養育期」「教育期」「排出期」「老年期」「孤老期」の6つの家族周期で分類した（図3）。

「新婚期」は、夫立ち会い分娩をテーマにした1編のみであった。「養育期」、「教育期」の子育て期間の家族を対象とした研究は32編あった。そのうち10編は「養育期」と「教育期」にまたがる家族を対象としており、「養育・教育期」とした。「排出期」、「老年期」、「孤老期」の壮年～老年期にあたる家族を対象とした研究は25編であった。そのうち16編は「排出期」と「老年期」にまたがる家族を対象としており、「排出・老年期」とした。その他は、3つの家族周期の家族を対象とした2編を「3期」、研究対象者の家族周期が特定できない20編を「特定困難」として分類した。

また、研究対象者の生活の場では、在宅や地域に居住する家族が49編、病院や施設が18編、特定が困難なものが13編であった。

4．研究方法

研究方法の内訳を図4に示した。調査研究が63編で最も多く、全体の3/4近くを占めた。調査の方法では、面接法が41編、質問紙法が21編、面接と質問を複合的に使用したものが1編であった。事例研究は、実習での受け持ち患者などを研究対象として9編あり、手記などの文献の事例を使用したものが4編あった。文献研究は4編であった。

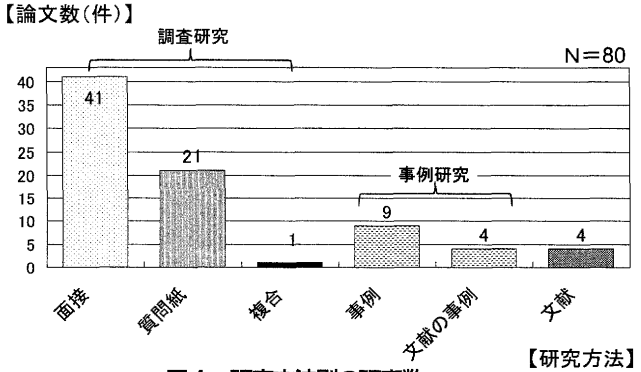

図4　研究方法別の研究数

Ⅳ．考察

1．家族看護に関する卒業研究の動向

我が国の家族看護の歴史は、古くは戦後にその端を発しているが、1960年代から母子関係、1970年代から不登校やアルコール拒食症などの精神的問題、1980年第から高度医療や慢性疾患、ターミナル患者の家族を対象に、1990年第は社会の高齢化を背景に発展してきた[6]。80編の研究を概観したところ、これまで家族を対象に幅広いテーマで研究に取り組まれており、発展過程と一致する内容も多い。この9年間に取り組まれた研究テーマと社会背景との関連では、2000年の介護保険制度施行後に「介護関連」「在宅介護」のテーマが増えたことが挙げられる。1996年の看護教育カリキュラム改正で老年看護学が強化され、在宅看護論がスタートしたことも少なからず影響したと考えられた。また、「育児関連」の研究の動向と1999年の新エンゼルプランの実施との関連が考えられた。

2．今後の家族看護に関連した卒業研究の指導上の課題

1）研究テーマの選定

小児・母性看護学領域での「育児関連」や老年・地域看護学領域での「介護関連」など、各看護学領域や各家族周期の代表的な発達課題に取り組んだテーマも多い。しかし、看護学領域や研究対象者の家族周期の特定が困難な研究もみられた。家族看護はあらゆる看護学領域にまたがるものであり、さまざまな看護学領域から取り組みが可能である。自己の取り組もうとするテーマは家族看護においてどのような意味をもつのか、研究の目的や意義を明確にして研究に取り組んでいくことが課題である。

アメリカでは、1970年代から家族形態の多様化に着目した研究が報告されており[7]、我が国においても「ひとり親家族」[8]に着目した研究が報告され始めている。家族が果たす機能は時代とともに発展し変化するものであり、伝統的な家族のすべてが「よい家族」でも現代の家族のすべてが問題を抱えているわけではない[9]。多様な家族形態を理解し家族看護に活用するためには、個々の家族の形態や構造からその家族の独自性を理解し、家族のQOL向上にむけた看護が重要である。さらに、家族の理解においては、各国の文化的な背景の影響も大きい。研究テーマの設定においては、わが国の家族に関する文化的な背景の理解と、社会背景の変化に関心をもち、現代の社会と家族のニーズをとらえることが重要である。

2）研究計画の検討

研究対象者の6割以上が在宅や地域に居住しており、全

体の8割近くが調査研究であった。臨地実習での受持ち事例を研究対象に選択することは困難になっているのが現状である。今回の分析対象では、事例研究9編のうち、臨地実習での受持ち患者を研究対象に取り組んだ研究は3編で、基礎看護学実習Ⅱ、成人看護学実習、小児看護学実習での事例であった。事例研究が少ないことは、学生の研究テーマの決定時期との関連が大きいと考えられるが、1、2年次までの机上の学習と実習経験とをつないで事例研究を行うことは、学習の積み重ねとしても、研究の蓄積としても重要である。

事例研究では、学生の家族や知人を研究対象として、学生の個人的な経験が研究の動機になっている研究も散見された。個人の経験は研究への関心やモチベーションを高める反面、事象を客観的にとらえることが困難になる危険性も大きい。やむを得ず、学生個人の経験をもとに研究に取り組む場合には、事象を客観的に科学的に思考するよう努めることが求められる。

看護学領域では、「成人看護」と「精神看護」での取り組みが少なかった。今回の分析では、終末期看護に分類した研究の中に数編、「成人看護」に該当する研究はみられていた。「成人看護」での家族看護の視点としては、終末期のほか、急性期や慢性期にある患者と家族が挙げられる[10]。また、「精神看護」では、精神障害者の家族会に関する研究1編のみであった。A短期大学における「精神看護」領域での家族看護に関する研究の蓄積がスタートしたといえる。短い実習期間の中では、受持ち患者の理解が中心となりがちだが、常にその家族への関心を高め、家族看護の理解が深められる研究の取り組みが増えることを期待したい。

3）家族看護に関する教育カリキュラムとの関連

鈴木らが1995年に家族看護学の教育の現状を調査した結果[11]では、家族看護学の教育はその多くが地域看護学や保健婦(当時)養成機関での取り組みであり、教育内容別では多領域での取り組みであるため、整合性の保持またはカリキュラム上の位置づけが課題と述べている。また、Gillisは、家族看護学教育のレベルについて、ジェネラリスト育成を目指す学部課程では背景としての家族あるいは社会の構成要素としての家族を対象に活動するための基礎を身につける必要があると述べている[12]。A短期大学では、家族看護に関する内容は各看護学の教育の中でおこなっており、各看護学における家族の特徴を踏まえたうえで、看護の実践、研究的な取り組みの必要性へと家族看護の理解が深まるように教育をおこなっていくことも課題である。

謝辞

研究をまとめるにあたり、貴重な資料を提供してくださったA短期大学卒業生の皆さまに深く感謝いたします。

文献

1）小野寺杜紀：卒業研究の目標、指導にあたって－準学士の卒業研究－、Quality Nursing，5（2），4-8，1999.
2）鈴木和子、渡辺裕子：家族看護学　理論と実践第1版、日本看護協会出版会、4-6、1995.
3）前掲2）、7
4）前掲2）、9
5）前掲2）、55
6）前掲2）、5-6
7）野嶋佐由美監訳：家族看護学　理論とアセスメント、へるす出版、13、1993.
8）平谷優子、法橋尚宏：ひとり親家族に関する国内文献の動向と看護学研究の課題、家族看護学研究、13（3）、165-172、2008.
9）村田恵子他監訳：家族看護学　理論・実践・研究、医学書院、14、2001.
10）横川絹恵、斉藤静代ほか：家族看護の意義と研究の動向、香川県立医療短期大学紀要、1、95-104、1999.
11）鈴木和子、渡辺裕子ほか：家族看護学に関する教員の意識と教育の現状、千葉大学看護学部紀要、18、21-30、1996.
12）前掲9）、29

A短期大学看護学科における卒業研究の動向

Trend of the graduation researches in A Junior College Nursing Department Analyses from the viewpoint of the family nursing

Kaori KINOSHITA, Yoshiko YAMAGATA, Junko KAKEYA, Sachiko KOJO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi,Okayama718-8585,Japan

Summary

The purpose of this research is to clarify the trend of the graduation researches that deal with the family nursing for nine years from 1999 in A Junior College Nursing Department. Eighty research papers concerning the family nursing were analyzed among 561 graduation researches for nine years. The students took up typical developmental themes in each family lifecycle like the child and elderly care and so on as the topics of researches. The social background seemed to be related to the trend of topics of researches. In the research method, there were many surveillance studies with the interview method and the questionnaire investigation method. The education and the research guidance are necessary so that the students can understand the families' diversified forms and functions which are changing along with the social background.

Keywords: graduation researches, family nursing, trend of graduation researches